

市民プラザ塾「東久留米の歴史を学ぶ」第二回講座

今回のテーマは「縄文のふるさと、東久留米」です。

猛暑の中での開催にもかかわらず、全員出席です。

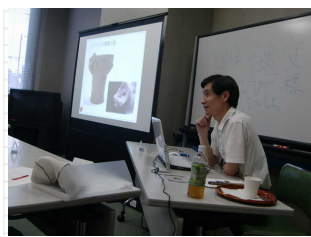
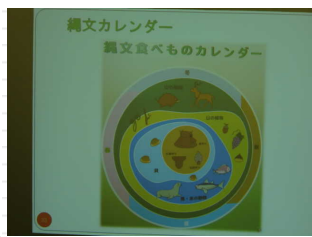
遠く人類の出現の話から始まりました。

人類の始まりの時期に関しては、諸説ありますがその始まりの「場所（ふるさと）」だけは共通しているのだそうです。

そこは・・・「南アフリカ」です。ケニア・タンザニア付近だそうです。

まさに「人類みな兄弟！！」

現在の人間の直接の祖先は、ホモサピエンス、約10万年前です。
5万年～7万年前には、一部はヨーロッパへ、また一部は中国方面へ・・・そして3万年～4万年前には当時大陸と地続きであった日本へ陸橋（りつきょう）を渡ってわたりつた。・・・というのが確定的な説のようです。
つまり日本人の先祖は、動物を追って遠くアフリカから日本列島にやって来たのです。
この時代は、いわゆる旧石器時代でナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物食料とする狩人の時代です。



東久留米には河川流域の36か所でこの時代の生活跡（遺跡）が確認されています。

やがて1万年位前から、温暖化が始まり、海水面が上昇し陸橋が水没し日本海ができました。

これらことにより四季が明瞭となり、森ができ、又海も近くなり、山の幸・海の幸に恵まれることとなります。

このことが日本文化にとり歴史上大きな転換点となりました。

つまり温暖な気候により、豊かな植物食糧（ドングリ・クリ・クルミなど）の採取と管理が主体となり、動物だけにたよらず、森を中心として年間を通じて安定し植物に恵まれ、定住化も進むこととなります。

こうして東久留米は典型的な「森の文化」となったのです。

しかしこれらの食糧はそのままでは食に適さず、人間にとってはまだ食べられないデンプンであり、アクをとり食べられるデンプンとする必要がありました。

これらにまず必要なものは「湧水」、そして道具としての「土器」でした。

縄文土器は文字通り縄目の土器ですが、これは単なるデザインとしての模様ではなく、煮沸の熱効率を上げるための、合理的な工夫なのです。

つまり縄目により土器の表面積が1.2～1.5倍にもなり、熱効率が格段に上がりました。

東久留米の湧水群近くに100か所以上もの遺跡が確認されており、多くの土器も出ています。

およそ5000年前の縄文時代中期の東久留米には、河川流域に700メートル間隔で6つの集落が位置していたことが確認されています。

その中心は、自由学園内で発掘された遺跡で推定500軒（20～30軒が同時期に建っていました）規模で東久留米での拠点集落であり、有事の際にはここを中心にまとまり、協力して事に当たったようです。

しかし時代は又気候の変化（今度は小規模な寒冷化）にさらされ始めました。

これとともに東久留米から住居跡がなくなり、その後の弥生時代になっても人は住みつかず、以後長い期間にわたり帰ってこない・・・状態となってしまったのです。

ここにも「湧水」の影響が・・・と想像をしたところで、今回は終了となりました。

（写真は関係者の了解を得て掲載しています）